

## ポーランドオーディオショー見学記

編集委員 森 芳久

11月8日(土)9日(日)の二日間、ポーランドの首都ワルシャワでオーディオショーが開催された。ちょうどワルシャワ近郊に住む家族を訪ねていたのでこのショーに出かけてみた。このオーディオショーは今年で18回を迎え、年々人気が高まっているとのことである。関係者は口を揃えて欧州ではミュンヘンに次ぐ大きなオーディオ関連ショーだと自慢していたのが印象的であった。

ポーランド(正式にはポーランド共和国)は2004年EUに加盟して経済発展を遂げて来たが、日本では他のヨーロッパ諸国のように有名ではない。簡単に紹介すれば、西にドイツ、東にベラルーシやウクライナ、南はチェコ、スロバキアそして北がバルト海に面した約31万km<sup>2</sup>領土に3,800万人の人口を有する、一人当たりのGDP約\$23,000、世界25位の国である。

過去に何度も近隣国に占領され分断された痛々しい歴史を持つだけに、ポーランド人は自国に対する誇りや文化意識は高く、それはポーランドが排出した多くの偉人たちに投影されている。

閑話休題、このオーディオショーの会場はワルシャワ市内の中央に位置する三箇所の Bristol、Golden Tulip そして Radisson Sobieski ホテルの客室、会議室、などを使って開催された。そのメイン会場となったのが Radisson Sobieski ホテルで中央駅からのアクセスも良く、他のホテル会場にも徒歩で行ける範囲である。会場小部屋の数110室、トータルの広さは約3,000m<sup>2</sup>、出展者数は104と、日本のどのオーディオショーよりはるかに大きく賑やかなものであった。

このショーを企画運営しているのはアダム・モクロツキー・サービスという個人会社であり、ポーランドのオーディオ・ビデオ雑誌数社が協賛している。

入場料は25zł(ズウォティ)日本円で1,000円弱、この国の水準からいけば安くはない金額だが、それでも連日大入り満員の盛況ぶりであった。事実、メイン会場の Radisson Sobieski ホテルでは、早朝から長蛇の行列ができ、開場時間の10時を1時間過ぎても、その行列は短くなるどころか長さを増していた。

中学生以下は無料とのことだったが、それにしても家族連れや女性、子供の姿が多く、また熱心にブースで試聴している姿が印象的であった。どこのブースも満員状態で、ここではオーディオ不況、オーディオ離れなどの言葉は思い浮かばないほどである。海外ブランドの輸入代理店や販売店がブースを出しているところが多かったが、ポーランドメーカーの出展もあり、面白い製品が少なくなかった。

SONYやDENONなど日本のブランドもいくつか出展があったが、特に目立ったのはTechnicsが大きな部屋で新製品のサウンドデモを行い、ショー前日に記者発表をするなど本腰を入れてカムバックしてきたことだろう。これは嬉しいニュースであり、現地でも歓迎されていた。どこの国もハイエンドの世界ではアナログレコード、そして真空管アンプが未だ君臨しているが、ここでもアナログレコードがプログラムソースとして幅を効かせ、また真空管アンプの新製品なども人気を集めていた。

一方、ヘッドホンやイヤホンへの興味や需要が急速に伸びており、同時にポータブルオーディオ機器やヘッドホンアンプなどのへの関心が高まっていて、ヘッドホンやポータブルオーディオの展示デモが目立った。ヘッドホンでは日本のファイナル・オーディオ・デザインが健闘しており、同時に Olasonic の NANOCOMPO も初めてポーランドに紹介され、注目を浴びていた。

会場に訪れる人はオーディオファンのみならず音楽家も多く、その何人かと話をする機会を得た。一人はポーランドのテノール歌手ヴィトール・マツルカ氏（写真 A）、もう一人はヴァイオリニストそして独創的な楽器を開発演奏しているパトリック・ザクロツキー氏（写真 B）だ。マツルカ氏はアナログレコードが大好きだということで大いに話が盛り上がった。またザクロツキー氏は今年来日してポーランド大使館で演奏をしている。そのときの演奏をオノセイゲンさんが DSD で録音しており、私の KORG MR-2 にコピーをもらっていたので、その音源を彼に聴かせたところ素晴らしいを連発してくれた。彼もまたアナログレコードが好きで、DSD の音はアナログ的だと評してくれた。



（写真 A）ヴィトール・マツルカ氏



（写真 B）パトリック・ザクロツキー氏

マツルカ氏の HP: <http://witoldmatulka.pl>

ザクロツキー氏の HP: <http://patrykzakrocki.com>

ホテル内の個々の部屋では、素晴らしい音を出しているブースが多い中、「どうしてこんな音をデモするのか」と疑問に思うほど酷い音をデモしているところもあった。その昔、日本でもエキセントリックなサウンドデモをするところがあったが、ここでも真顔でそんな音を出し、また来場者も熱心に試聴している姿を見ると少し複雑な気持ちとなった。オーディオの世界でも「良音は悪音を駆逐する」と信じることにしてその部屋をそっと抜け出した。

しかし、ショー全体としては真剣な眼差しのオーディオファンが多く、その熱気は素晴らしいものがあり、子供から女性まで幅広い人たちが集うこのショーに、日本のオーディオフェア華やかなりし頃のイメージが重なって見えた。

ちなみに、このショーの入場者数は昨年が約 7,000 名とのことである。この数字は入場料を支払った、または招待状を入場券に換えた人の数字を合計したもので、日本のショーで発表される楽観的な公称数字とは異なるものである。今年の入場者数はまだ発表されていないが、関係者の速報によれば 8,000 名を超え、出展者数やブランド数などで過去最大となったとのことである。

ポーランドのオーディオショー、以下にスナップ写真をご紹介しますので、その雰囲気味わっていただければ幸いです。



(写真1) ワルシャワ中央駅近くのメイン会場となった Radisson Sobieski Hotel. 地元では旧名の Jan III Sobieski (ヤン三世ソビエスキー・ホテル) と呼ばれている。



(写真2) 8日初日開場を1時間経っても、小雨の中まだまだ長蛇の行列が続いていた。



(写真3) オーディオショーのチケット一日券、25ズウォティ(約1,000円)連番がふってあり入場者数分かる。これは二日目の早朝のもの。既に5,300を超えている



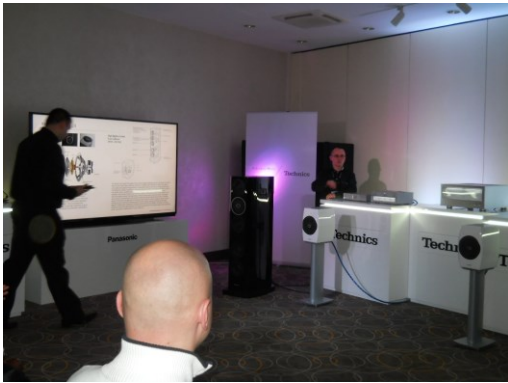
(写真4) ホテル内の案内板、各フロアに同様の看板が立ち来場者をスムーズに目的のブースに誘導していた。



(写真5) オーディオファイルのための高音質LPやCD、SA-CDの即売はこのショーでも人気の高い。



(写真6) 協賛のオーディオ雑誌や音楽雑誌のコーナーでは、雑誌やCDをショー特別価格で販売していた。



(写真7) 高級ラインナップを展示サウンドデモするTechnics。ブランド復活、オーディオ再建の強い情熱が伝わるブース。今後の健闘を祈りたい。



(写真8) ポーランドでもアナログレコードの人気は高くProjectのブースはいつも満員で熱気に溢れていた。



(写真9) ポーランドのメーカーALLMETAUDIOのJ.Sikora氏設計のreferenceターンテーブル。4個のモーターによるベルトドライブ方式。一切の妥協を排したというが重量は100kgを超える。同社はプリアンプも設計しているが、こちらも30kgと重量級だ。



(写真 10) これもまたポーランドの JR AUDIO 製ターンテーブルとトーンアーム。トラッキングエラーを自動補正するアームが優れもの。



(写真 11) イギリス naim の新製品 Mu-so。同社初のワイヤレスシステムで 450W の内蔵アンプで 6 個のスピーカーを駆動する。Ethernet、Wi-Fi、また Bluetooth に対応。



(写真 12) このショーでもヘッドホン、イヤホンの人気が高く、日本のファイナル・オーディオ・デザインも地元ポーランドの代理店がブースを出していた



(写真 13) ファイナル・オーディオ・デザインが来場者サービスとして行ったヘッドホン組み立て講習会。遠くから半日をかけて駆けつけたファンもいてイベントとしては大成功のようであった。



(写真 14-15) Olasonic の NANOCOMPO がポーランドで初めて紹介され大きな注目を浴びていた。小型でスマートな外形は子供達にも人気が高かったようだ。



(写真 16) 今回、個人的に面白いと思ったのが ENCORE SEVEN の真空管アンプ、その名も Egg-Shell Prestige。A 級シングルエントッド構成でなんと V8 エンジンのようだ。



(写真 17) どのショーにも必ず顔を見せるオランダのケーブルの奇才 Van den Hul 氏。今回も新製品 3TCS-18 のデモで弁舌を振るっていた。サウンドデモには私の愛用の Lyn Stanley の Lost in Romance をかけてくれた。



(写真 18) MBL の呼吸球スピーカー111F によるサウンドデモ。いかにもドイツらしいカチとした音と奥行きのあるサウンドが魅力だ。